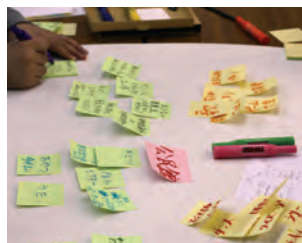


子ども向けユニバーサルワークショップ・ファシリテーター育成講座

子どもゆめ基金（独立行政法人国立青少年教育振興機構）助成活動

平成 24 年度 実施報告書



公益財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金

目 次

1. はじめに	5
2. 事業概要	6
3. 講座の様子	
(1) 札幌会場	8
(2) 大阪会場	16
(3) 郡山会場	24
4. 講師からの振り返り	
(1) (株)ランテック計画事務所取締役 中尾幸彦氏（札幌・大阪・郡山会場講師）...	30
(2) 名古屋短期大学教授 寺田恭子氏（大阪・郡山会場講師）	32
(3) 明星大学教育学部教授 星山麻木氏（札幌会場講師）	34
5. アンケート集計	36
6. 資料	
(1) 新聞掲載記事	41

はじめに

私たちは、障害のあるなしに関わらず、全ての人々がよりよい社会づくりのために協働し、共生社会の想いを広めるための事業を、スポーツや音楽などの取り組みやすい切り口で、共に体験する場をつくり、理解を深めていただく活動をしています。

その中でとりわけ子どもへのアプローチとして、障害のある子もない子も自然に入りやすい形でコミュニケーションをとり、お互いの心が近くなる方法はないだろうか、と考え、行きついたのが、ワークショップという参加体験型の学びの方法でした。

ワークショップはワクワクして楽しいです。創造があり、希望があります。人との心が近くなり、心が動かされます。

このようなことから、私たちは、音や音楽、身体表現を用いて心を開き、ノンバーバルコミュニケーションを楽しみながら合意形成をするユニバーサルワークショップを提案し、全国各地で多くの子どもたちと出会ってきました。その場を楽しみやすい空気に変えて、一人ひとりが安心して居心地がいいと感じる環境をつくることで、子どもたちが、お互いのありのままを認め、受け入れ、自然と仲良くなる場面がそこにはありました。

この経験から、ワークショップの持つ、参加する人すべての主体性や合意形成に至る考え方が、多様な子どもたちが出会い、学びあう場づくりの手法に適していると考え、子どもを指導する大人の方々に、ワークショップやファシリテーションを知っていただく機会とし、講座を開催いたしました。

人は一人ひとり違うのが当たり前で、ユニークであることを前提に、違いを認めつつ、様々な人たちと関わる態度や意欲を育てることが、多様性を尊重する社会を形成する基礎につながっていると思っています。全ての子どもたちのために、学校や地域が居心地の良い場になることを切に願います。

最後になりましたが、この取り組みに助成いただきました、独立行政法人国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金助成活動に感謝申し上げますと共に、講師をお引き受け頂きました、(株)ランテック計画事務所取締役 中尾幸彦さん、名古屋短期大学教授 寺田恭子さん、明星大学教育学部教授 星山麻木さんに御礼申し上げます。

平成25年4月

公益財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金

2. 事業概要

- (1) 主 催 公益財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金
- (2) 後援（共通） 内閣府、厚生労働省
- (3) 助 成 独立行政法人国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金
- (4) 参加対象者 教育、福祉従事者、子どもの活動する場の指導者、これから活動予定のある学生、その他関心のある全ての方
- (5) 参加費 一般 5,000 円、学生 3,000 円（2 日間通して）
- (6) 各会場の詳細と位置づけ

1) 札幌会場（北海道）

- 日程 2012 年 11 月 23 日（金・祝）、24 日（土）
- 時間 < 1 日目 > 10 時 30 分から 17 時 < 2 日目 > 9 時から 12 時 30 分
- 会場 あいおいニッセイ同和損保 札幌千代田ビル 11 階
- 後援 札幌市、札幌市教育委員会
- 協力 NPO 法人自立支援センター歩歩路
- 参加者 30 名
- 講師 明星大学教育学部教授 星山麻木
(株)ランテック計画事務所取締役 中尾幸彦
ナイスハート基金事務局長 鈴木 実
- 内容 < 1 日目 > オリエンテーション、プチ講座「ワークショップとは」、
アイスブレイク「自己紹介」、合意形成型の付箋を使用したワークショップ体験、
今日の振り返り
< 2 日目 > ノンバーバルコミュニケーションワークショップ体験、
プチ講座「障害のある子どもを対象としたワークショップの要点等」、
講師の意図開き、全体の振り返り、質疑応答等

2) 大阪会場（大阪府）

- 日程 2013 年 3 月 2 日（土）、3 日（日）
- 時間 < 1 日目 > 13 時から 19 時 < 2 日目 > 9 時 30 分から 12 時 30 分
- 会場 大阪市立西区民センター
- 後援 大阪市、大阪市教育委員会
- 参加者 9 名
- 講師 名古屋短期大学教授 寺田恭子
(株)ランテック計画事務所取締役 中尾幸彦
ナイスハート基金事務局長 鈴木 実
- 内容 < 1 日目 > オリエンテーション、プチ講座「ワークショップとは」、
アイスブレイク「自己紹介」、
プチ講義「障害のある子どもない子どもと一緒に楽しむワークショップの活動紹介と
大切にすべき点等」、身体表現ワークショップ体験、今日の振り返り
< 2 日目 > アイスブレイク（ダンス）、合意形成型ワークショップ体験、
講師の意図開き、全体の振り返り、質疑応答等

3) 郡山会場（福島県）

日程 2013年3月23日（土）、24日（日）

時間 <1日目> 10時30分から17時 <2日目> 9時から12時30分

会場 ニコニコこども館（こども総合支援センター）

後援、協力 福島県教育委員会、郡山市教育委員会

参加者 11名

講師 名古屋短期大学教授 寺田恭子

（株）ランテック計画事務所取締役 中尾幸彦

ナイスハート基金事務局長 鈴木 実

内容 大阪会場と同様

（7）活動の目的と背景

子どもを育む場で活動する指導者が、ワークショップの考え方やファシリテーションの技法を学び、それぞれの現場で活用する勇気と技術を育てることを、この講座の目的としました。

ファシリテーションは人が集って何かをする時、お互いの良いところを活かし、創造的な成果に結びつけることを容易にする道具です。そしてファシリテーターはその道具を使って、一人ひとりの主体性を育み、学びや創造を促す進行役です。

ワークショップやファシリテーションという言葉にとらわれなくても、これらの考え方や技法は、子どもが集う場にとっても適していると思われ、それぞれの現場で取り入れていただくことで、子どもの心が豊かになれば、やがて障害の問題もクリアになるのではないかと考えました。

この考えを共有できる大人たちを増やすことで、全ての子どもたちが生きやすい社会になることを目指しています。



ナイスハート基金が行っている、子どもを対象とした「ユニバーサル音楽ワークショップ」の様子

3. 講座の様子

(1) 札幌会場

日程：2012年11月23日（祝）～24日（土）

1日目10：30～17：00 2日目9：00～12：30

場所：あいおいニッセイ同和損保札幌千代田ビル 11 階

参加者数：30名



昨年度、異なる分野でワークショップを実践するファシリテーター4人による、ファシリテーター養成講座のプログラムデザイン研究会を立ち上げ、1年間かけて議論を重ねてきました。その成果をお試し講座で検証し、再度プログラムを練り、今回の講座を開催することになりました。

全国3会場で実施することになり、札幌からスタートです。



【1日目】

<セッション0 はじめに>

主催のナイスハート基金業務執行理事 潤口良一氏の挨拶から始まり、次いで、ご厚意で会場を提供いただいた、(有)オフィスブレイン代表取締役佐々木厚史氏からご挨拶をいただきました。素晴らしい会場を無償でご提供いただき本当に感謝です。ありがとうございました。



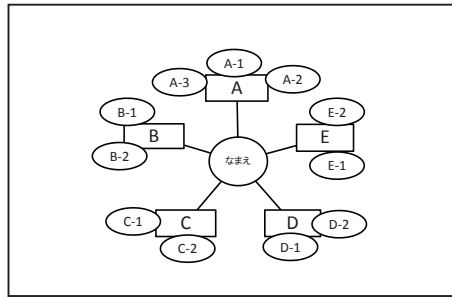
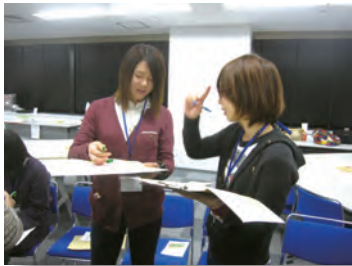
<セッション1 はじめのいっぽ>

まずはじめに、ワークショップとは何だろう、ということで、私たちが考えるワークショップの目的や大切にしたいこと等についてプチ講義がありました。



○アイスブレイク

続いて、アイスブレイクを兼ねた自己紹介ゲームを行いました。まずはA3用紙の真中に自分の名前を書き、その周りに自分が関心のある事や関係することを単語で書きます。さらにその項目の周りに関係する事がらを書き出していきます。



例えばとして講師の場合は、「鈴木実」の名前が真中にきて、そのまわりに「野球」「伊豆出身」などが記され、さらに「伊豆出身」の周りには「魚好き」「水泳」等が書き出されていました。これを見本として、各自5分で自分のマトリクスを作成します。

自分のマトリクスが出来たら、2人1組になって自己紹介をします。1人2分の時間が与えられるので、1組の持ち時間は4分。合図とともに違う人とペアになって、合計3人に自己紹介をします。

はじめは緊張していた参加者の方も、徐々に和やかになってきました。

次にみんなの前で発表します。

アイスブレイクにはいろいろなものがありますが、今回は自己啓発型のワークショップにつながる内容のものでした。

アイスブレイクとは専門的に使われる用語で、人と人のよそよそしさやわだかまりを解いたり、話し合うきっかけをつくるためのちょっとしたゲームなどのことをさします。

自分のマトリクスを作成して、それをもとに自己紹介するという方法は、初対面の人とも話しをし、相手を理解するきっかけづくりになると同時に、自分のことをあらためて知るきっかけにもなりました。また、参加者それぞれからワークショップを楽しもうという意欲が湧いてきたように思えました。

場が温められたところで、ワークショップの構成例やユニバーサルデザインの概念についてもわかりやすく説明がありました。

<セッション2 はじめてみよう(1)>

講師は中尾氏にバトンタッチ。

○事例紹介

中尾氏が今までにワークショップ運営をした経験についてお話がありました。ワークショップには多様な分野があり、様々に分類されます。



ここでは幅広い参加者の合意形成を目的としたまちづくり系のワークショップの一例が紹介されました。中尾氏がファシリテーションした「公園にビオトープをつくろう」というワークショップです。年齢や性別、職業に関係なく、地域の住まい手と働き手がともに参加し、人を含めた多様な命が集う公園ビオトープにするために、どうしたらよいかを夢を共有しながら話し合いで決めていくというものです。



〇ミニワークショップ体験

ワークショップではグループ作業を行うことが多く、①グループの作り方、②意見を出しやすくする手法、③まとめていく仕組み、④その際のファシリテーターの役割等を、ワークショップを体験してもらいながら説明いただきました。



テーマ「障害のある子とない子で、一緒に行うプログラムで大切にしたいこと」

①まずはグループづくり。今回は「朝起きた時間が近いもの同士」のグループをつくりました。ワークショップでは、アイスブレイクとしてグループづくりにつながるゲームを取り入れることもあるようです。



②はじめは個人での作業です。1人につき3枚のポストイットに大切にしたいことを書き出します。この際、1枚のポストイットには1つの項目（内容）のみを記入します。（3分）



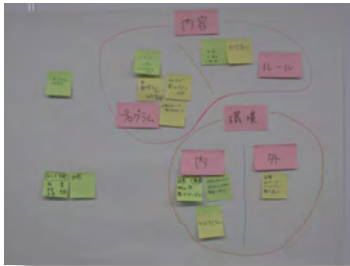
③グループ作業に入ります。各グループに1枚の模造紙を用意し、先程ポストイットに書きだしたものを各自で紹介しながら模造紙に貼ります。同じような内容のものは近くにまとめて貼っていきます。（5分）

④ここからはグループ内で合意しながらの作業です。同じ内容のものは重ね、似たものと思われるものはマジックで囲み、タイトルをつけます。（10分）

ここでの注意事項。

- ①書き出したポストイットは模造紙に必ず貼る（排除しない）
- ②人の意見を否定しない
- ③全員が納得しながら作業をすすめる





この作業で一番難しいのが③番目です。声の大きい人の意見に左右されるわけではなく、多数決で決めることもNG。それぞれ違う意見があって当然ですが、みんなが納得して進めていくことが前提となります。

昼食休憩の後、

＜セッション2 はじめてみよう（2）＞



まずは午前中のまとめです。各グループでまとめられたものを全体に共有しました。

この「障害のある子とない子で、一緒に行うプログラムで大切にしたいこと」で出されたことを留意して、次の内容に進みます。



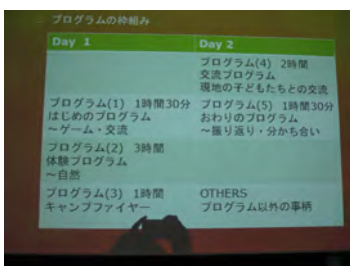
まずはグループ替えをします。今回は事前に講師が割振りをして考えたグループです。なるべく日常の活動内容が違う人同士で割り振りました。

グループ活動の説明をします。

テーマは「障害のあるなしに関わらず楽しめる子どものキャンプを企画しよう」です。

1泊2日、あらかじめスケジュールの枠組みは決められています。次の枠組みから1つ選んで、グループでプログラム内容を考えます。

- (1) 1日目はじめのプログラム（1時間30分）
- (2) 1日目体験（自然）プログラム（3時間）
- (3) 1日目キャンプファイヤー（1時間）
- (4) 2日目交流プログラム（現地の子どもたちとの交流等）（2時間）
- (5) 2日目終わりのプログラム（ふりかえり等）（1時間30分）
- (6) その他（プログラム以外の事から）



グループワークのスタートです。どのプログラムを自分のグループで考えるかを話し合います。先程の注意事項の通り、多数決はNGです。自然と各グループ内でファシリテーター役の人がでてきたりと和やかに話し合われているのが見受けられます。





ファシリテーターの役割のひとつとして「場づくり」があります。座る形ひとつで、グループの相互作用を有効に引き出せるかが変わってきます。なので簡単なようで、とても重要な要素になります。



グループの島の作り方にもいろいろなパターンがあります。会場のスペースや使用できる備品によって変わってきますが、今回はとてもめぐまれた会場だったので、島にした机の横に、椅子だけを丸く並べて、作業するスペースとそうでないスペースに分けてセッティングしました。

話しに集中するためには、机をなくして椅子だけを丸く並べた方が有効のようです。



本題に戻ります。グループでテーマが決まったら、1枚に1つの内容を書くルールで、プログラムの内容や気をつけることなどをポストイットにどんどん書き出します。1人何枚でもOKです。この時点での話し合いは必要ありません。

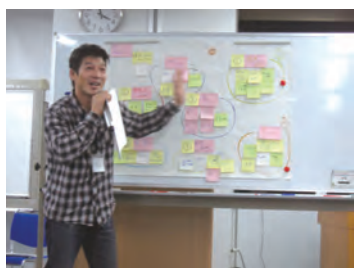


次に全員が納得しながら、午前中と同様、同じもの、似たものを集約します。そして具体的なプログラム内容を作り上げていきます。

話し合いながら、ポストイットの位置も動きます。丁寧に一枚一枚検討しながら似たものを集約することで、具体的な内容が見えてきます。グループによっては、季節や天候次第で内容が変わるということで、数パターンのプログラムを用意したところもありました。



しかしすべてが順調に進むわけではありません。人の数だけいろいろな考え方があるため、対立が生まれる場面もありました。対立はあって当然です。違いを認めつつ、どう向き合うかが重要で、このような時にファシリテーションの技術や引き出しが必要とされます。



お互いの主張の背景をシェアすることや、発言をカードに書いて可視化する作業を促すなど、対立の解決や合意を進める上で必要なファシリテーションを行いましたが、限られた時間内で有効な介入のタイミングを計ることは難しい問題です。



<セッション 3 今日のふりかえり>

作業が終わったら、グループごとに発表して全体で共有します。発表の仕方もグループ内で話し合います。

各グループとも、オリジナルでユニークなプログラムが企画されていました。

また、1人が代表して発表するのではなく、全員がリレー方式で発表するグループもありました。発表の仕方もグループ毎に特徴があり、こちらとしても新しい気づきがあり、楽しませて頂きました。また、アレルギー対策用のプログラムを用意していたグループもあり、どんな子どもも安心して楽しみ、参加できることを大切にしながらプログラムを企画している姿勢にとっても関心いたしました。

最後に今日感じたことをふりかえりシートに記入してもらい、一日目が終了しました。



皆さんが記入したシートはその日のうちに講師間で共有し、翌日のプログラムに反映できるよう打合せを行いました。

【2日目】

セッション 4 コミュニケーションワークショップ

2日目からは星山氏も加わり、ノンバーバルコミュニケーションのワークを交えながら、非言語的な表現やユニバーサルデザインの必要性等のプチ講義がありました。

コミュニケーションにおいて最も大切なのは、言葉を使わないノンバーバルコミュニケーションです。発語がない子どもや、言葉が話せても自分の伝えたいことを伝えられない子どもがいます。表情だけで心の中を理解することが難しい子どももいます。また言葉と本当の気持ちとは違うことを話す子どももいます。その時大切なのが、言葉をこえたコミュニケーションです。言葉や視覚的なことに頼らず、人間本来の感覚や感受性でのコミュニケーションが大切となります。



子どものワークショップや活動をする際に、大切にしてほしいポイントを3つ共有しました。

- ①みんな違って、みんないい
- ②同じ価値観を押し付けない
- ③勝ち負けをつくらない

このことで、ひとり一人が尊重され、人の見方や考え方は多





様であることを知り（多様性の尊重）、だからこそ、心がつながることが大切だということに、子ども自身で気づくための促進役が、ファシリテーターの役割であることを感じていただけたかと思います。

○ ET ごっこ

「ET」という映画があります。宇宙人と少年が心を通わせる映画です。指先と指先をあわせると、お互いの指先が光る印象的なシーンがあります。心が通じた瞬間です。それをやってみましょう。

2人組になって、指先だけをつけて、目を閉じます。静かな音楽に合わせて、指先だけでコミュニケーションをとります。音楽が終わったら目を開けて、お互いに感想を言い合います。「俺についてこいタイプ」と「そうでないタイプ」に分かれたりと、相手が違くと動きや気持ちが変わる体験をしました。

○ 見えないボール

6人グループの中に見えないボールを1つ作り、隣の人に渡します。どんなボールかイメージして、別の相手に渡します。大きさ、形、匂い、色、硬さ等、イメージがどんどん膨らみ、小さなボールがだんだん大きくなって、グループで1つの大きなボールを持ち上げます。そのボールを別のグループに投げてみましょう。

これは、発想の豊かさを引き出しながら、競走もなく、失敗もなく、楽しくコミュニケーションがとれるワークです。失敗があると緊張してできなくなることがあり、楽しくありません。見えないボールは投げると相手が面白そうに拾ってくれる。相手とのコミュニケーションの楽しさを体験できる即興的なワークです。

<セッション5 実際に行うために>

星山氏のセッションの振り返りです。中尾氏が自身の感想も交えながらインタビューするといった、トーク番組形式ではじまりました。

中尾 / 大勢の中に障害のある子どもが少数の場合、多数派の子どもたちへはどのように対応したらいいのでしょうか。

星山 / 「あの子ばかりずるい」といった心の問題ですね。それぞれできることが違うので、ひとり一人の価値観を理解して、それぞれの良い点、出来た点を褒めてあげてください。



中尾 / ファシリテーターは安心感を与えるのが必要ですが、先生は皆さんがワークをしている時もずっと笑顔で見えていました。それは意識したものでしょうか。

星山 / いいえ、皆さんが楽しんでいる様子を見て、自然にそのような表情になってたんですね。

次に受講者からの質問タイムです。時間が足りなくなる程で、それぞれ現場で様々な課題を抱えていることがわかりました。参加者 / 何をしても興味を示さなく、何も引き出せない子にはどうしたらいいのでしょうか。

星山 / 興味を示さない理由が必ずあるので、それが分かるとおのずと扱いが見えてきます。心理的、生理的、発達水準の違いや環境の問題など様々です。その子の好きな歌や音楽を知ること、その歌を使ってステップアップしていく手段もあります。しかしその子に合った方法を見つけるには、支援する側の引き出しに、いくつもその方法を知っている必要があります。

○指人形を使って会話をしましょう

自分で決めた擬態語、例えば「ポ」「にゃんにゃん」だけで会話をします。はじめ2人組で、その後グループで。どんな人とでもコミュニケーションがとれます。言葉ではないので、声の質や間などで会話をします。感覚で相手の心を感じます。ちょっとした物を使いながら楽しい共有体験をすることで、心と心がつながるきっかけになります。特別支援を必要とする子どもや、あまりよく知らない人とのコミュニケーションのきっかけを得るには、このようなワークが有効的です。

最後に講座全体のまとめです。

質疑応答の後、各講師の皆さんからどのような気持ちで進行していたか、なぜあの時あのような判断をしたか、また自分の中の課題等についてもお話しいただきました。

この2日間、自分の想いや他の人の想いをじっくりと共有したことで、今まで気づかなかった新しい発見や、自分の気持ちの変化など、それぞれの心に様々な動きがあったと思います。

最後に「それぞれの現場でワークショップができそうな気がした人、試してみようと思った人は手を挙げて」との質問に、なんと全員の手が挙がりました。自信に満ち溢れた顔の人もいれば、周りを伺いながら恥ずかしそうな方もいましたが、この経験がそれぞれの現場に戻り、どのように子どもたちへ実践していくのか、そして子どもたちの学びがどんなにか深まるのかと想像しただけでワクワクします。ふりかえりシートを記入して、2日間の講座を終了しました。

(2) 大阪会場

日程：2013年3月2日（土）～3日（日）

1日目13：00～19：00 2日目9：30～12：30

場所：大阪市立西区民センター

参加者数：9名



【1日目】

<セッション0「はじめに」(オリエンテーション)>

札幌に続き、2回目の開催です。まずこの2日間で行う講座の目的や課題を全員に共有しました。通常、参加者はチラシに書かれてある情報だけで申し込まれるので、主催する側の想いとは違う想いや期待でこの場にいらしている可能性もあります。はじめにきちんと言葉で伝え、同じ方向を目指すことで、これからの2日間の時間が有意義な時間となるように進めていきます。



セッション1「はじめのいっぽ」

(1) プチ講義「ワークショップとは何だろう」

初心者向けということで、前回同様、ワークショップについてのプチ講義です。ユニバーサルデザインについての説明もあり、ワークショップは元々ユニバーサルな取り組みだと考えられるという点を共有しました。



いろいろな人が集まり、共同作業するとき、当然のことながら多様な意見がぶつかります。単純な正解はないので、相互の違いを認めあい、納得度を高めあいながら目的に向かって問合う方法としてファシリテーションはとても便利なツールです。そしてワークショップの進行促進役をファシリテーターと呼び、参加者が自ら考え、気づく場をつくる人、との共通認識を持ちました。ワークショップには心を動かす大きな力があります。この2日間を通して、実際にワークショップを体験し、参加者自身がその力に気づき、楽しさと希望、可能性を実感してもらえんと思います。そして自分の現場で子どもたちに試してみたいと感じてもらえる有意義な時間を過ごしてもらえんように願っています。



(2) アイスブレイク「自己紹介」



続いてアイスブレイクを兼ねた自己紹介ゲームを行いました。内容は前回札幌会場と同様のものです。初めに自分のマトリクスを作成し、その後2～3人組で自己紹介をしました。次にお互いの顔が見えるように円形になり、ひとりずつ自己紹介をしました。

<セッション2「はじめてみよう」>

(1) 事例紹介

寺田氏が代表をつとめる「ダンスサークル・トライアングル」の活動について話がありました。このサークルは障害のある子どもと家族、サポーター、名古屋短期大学寺田ゼミの学生等で構成されていて、障害のあるなしに関わらずみんなでダンスを楽しむ会として活動しています。1995年から始めているので、障害のある子どもは今は18才から27才になり、重症心身や脳性麻痺、ダウン症など種別、程度も様々です。昨年C B C テレビ（中部日本放送）の報道ニュースで取り上げられたV T Rも見ていただきました。

ここで印象に残っているのが、「トライアングルでは、人を傷付けることと警察につかまること以外は何をやってもいい」、ということ。お互いの心を開放し、自由な場の中でお互いを知り、仲良くなり、心から楽しみながら新しいものを築くこの活動は、多様性を尊重する社会を形成するための基礎になると感じました。

(2) 身体表現ワークショップ

次は実際に身体を動かしてワークショップを体験しました。ダンスを通してお互いが分かり合おうとする力を磨き、一緒に行うことで達成感や充実感を味わうことを目的とします。

○バーディソングの紹介

トライアングルでは、活動の始まりに必ず「バーディソング」というダンスをしています。このダンスは円形になり、どこでも誰を見ても同じ動き、シンメトリー（左右対称、左右均整）の振り付けになっています。ですから、覚えてなくても、見たまを真似をするだけで踊ることができます。

軽快な音楽に合わせて、みんなで輪になり、一緒に身体を動かすと理屈なしに楽しさを感じます。また、身体を動かすだけでなく、「ヘイヘイヘイ」と大きな声を出す場面では、日常大きな声を出すことが少ない人にとっては開放的な気分になりま





す。手を合わせたり、握ったり、触ったりすることも、ダンスだと自然と受け入れられます。ダンスは人と人とが自然に入りやすいコミュニケーション手段だと感じました。

次に、重度の身体障害がある人が参加する場合のポイントについてお話がありました。例えば、輪になったみんなが真中に集まる場面がありますが、車いすや補装具を使用している人は他の人より遅くなり、テンポがずれて、中に入れなくなる可能性があります。そのような時は、リーダーで指示をだす人の立ち位置が重要になってきます。動きが遅くなりがちなものの方にさりげなく近寄って、「みんなこっちに集まりましょう」と声かけをすればその子どもも参加できるというわけです。リーダーはたえずみんなを見て、そこにいるすべての人が参加できるように進めていく必要性を教えてくださいました。

○グループディスカッション

次に自分の現場にいる子どもがパーティソングに参加して一緒に楽しむにはどうしたら良いか、どのような工夫が必要かを考えてもらいました。参加者から出してもらった「こんな子」のパターンを次の3つに絞り、それぞれが興味のあるパターンを選択してアイデアを出し合います。

- ①集団からはみ出る男の子
- ②重度心身障害のある子（普段は床に寝そべって遊んでいる）
- ③思春期の中学生の女の子

次のようなアイデアがでました。①の子の場合は、壁にタッチして自分の時間を持たせてから中に入ってくるようにする、リーダーにする、子どもの名前を「ヘイヘイヘイ」の掛け声に置き換える、触れ合うことを多くする等。②は、介助者が促すことが前提になりますが、脇パッチンの時は楽器を鳴らす、自分が動けないのでみんなで回る時ではボールを回していく等。③は、はじめはみんなの中に入らなくても仲良しグループだけでやってもいいよと誘ってみて、まずは参加してもらう、得意なことを活かし、自尊心を高めるような言葉かけをする等。

一人でなく、みんなでアイデアを出し合うことで、自分では気づかなかった事や、より良いアイデアがいろいろと浮かびました。

○ダンスをつくり、自らで表現します

(1)「ピンク、青、黄色」の付箋（ポストイット）から自分の好きな色を2色選んで、ホワイトボードに貼ります。



(2)「青」と「黄」が多かったので、この2色で再度どちらかの色を選択します。

(3) 選択した色に分かれます。ちょうど5人ずつのグループになりました。

(4) その色から連想するあらゆるものを挙げます。

(5) その中からこのグループらしいイメージを1つにまとめます。

(6) この連想したイメージ（もの、ことなど）をダンスで表現します。ただし次の条件があります。

・4拍子×8＝32カウントを1パターンとして64カウント以上で創る。（あるいは3拍子×8＝24カウントで48カウント以上）

・自分たちの色の布を使用。その他必要ならば小道具も使います。布以外に、楽器（トライアングル、カスタネット、鈴等）、風船、新聞紙を用意しました。

(7) ダンスができれば、作品を発表します。

<青>・イメージ：うるおい

ダンスの中にストーリーがありました。みんなで手をつないで踊る場面では、初めは人間ウェーブを挑戦していましたが、なかなか上手くできないため、同じイメージで違う表現をみんなで楽しそうに試行錯誤している様子がとても微笑ましかったです。

<黄色>・イメージ：ハッピー

こちらのグループもストーリー性があるダンスでした。「ハッピー」というだけあって、みんな笑顔で楽しそうにラインダンスをしていたのが印象的です。中尾先生も若い参加者の中で頑張りました。

<セッション3 ダンスワークショップのふりかえり>

中尾氏がここからは講師として参加。みんなの顔が見えるように丸く円になって座ります。はじめに各自感じたことをひとつずつ話しました。ワクワク感があつた、動きながらのワークは話し合いだけよりもイメージが湧く、理屈なしに楽しかった、初めて会った人たちと短時間にひとつのことをやり遂げた充実感等、みなさんプラスの感想を話されていました。

また寺田氏からは、今回はダンスを通しての経験ですが、一緒に楽しむ、グループでひとつのことを成し遂げたという成功体験は、他の分野やそれぞれの現場でも活かしていけるのではないかと、との投げかけがありました。



次に中尾氏より赤、青、黄の色紙が配られました。

中尾氏 / ワークショップを初めて経験した人は「赤」、その他の人は「青」を挙げてください。…ほとんどの人が赤
次の質問、ワークショップが楽しかった、実り多かったと思う人は「赤」、まあまあのは「青」、そうでなかった人は「黄」。
…全員が「赤」でした。これには寺田氏満面の笑みでした。

これは言葉がなくても発言できる方法として紹介されました。



次に付箋を用いたワークです。問題解決法の一つです。

(1) 各自、ダンスセッションでの気づきを付箋（ポストイット）1枚に1つ書き出します。

(2) 書き出したものを、先程のチームにわかれて、それを一つ一つ出しながらみんなで同じような内容と思われるものをグループ化します。

(3) 次はチームでグループ化したものを、全体で一つにしてい
く作業です。

①模造紙にグループ化の束を貼ります。

②他のチームのものと同じと思われるものをまとめます。

③この第1のグループに名前（小ラベル）をつけます。

④小ラベルの集まりを更にグループ化したものに中ラベルを、

⑤中ラベルから似たものを更にグルーピングして大ラベルをつくります。

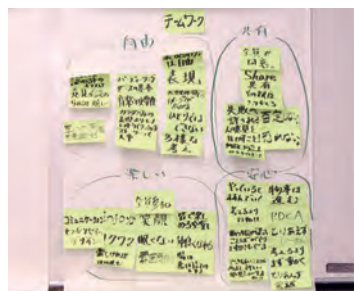


今回は大ラベルが「チームワーク」となりました。これらの関係をファシリテーターがみんなに一つ一つ確認しながら、参加者の想いを図解化します。この作業により客観的なカテゴリー分析が可能となり、たくさんの気づきを確認することができました。（左図参照）



最後に今日感じたことを振り返りシートに記入してもらい、一日目を終了しました。

皆さんが記入したシートはその日のうちに講師間で共有し、翌日のプログラムに反映できるように打合せを行いました。





【2日目】

＜セッション 4 アイスブレイク「じゃんけんダンス」＞

朝から元気な寺田さん。オープニングとして寺田さんオリジナルの「じゃんけんダンス」を体験します。これは、私たちナイスハート基金が行っている「ふれあいのスポーツ広場」の中で、障害のあるなしに関わらずみんなで一緒に楽しめるユニバーサルスポーツとして行っているものです。

(1) 各自付箋(ふれあいのスポーツ広場では洗濯バサミを使用)を5枚とって名札に貼ります。

(2) 2人組になり、向かい合わせになって握手をします。これがスタートポジションです。

(3) 音楽に合わせて握手を何回か繰り返し、最後にじゃんけんをします。

(4) 勝った人は嬉しいポーズを、負けた人は悔しいポーズをして、勝った人は負けた人の付箋を1枚もらいます。

(5) これをパートナーを変えて何回か繰り返します。

みんなとっても楽しそうでした。はじめは朝一番ということもあり、ついていくのにやっとの人も見受けられましたが、やっているうちにすぐに元気になり笑顔があふれ、夢中になっていました。

このダンスは勝ち負けを入れることで、参加するモチベーションがあがり、勝った喜びを感じることができます。逆に、負けてしまって自分の付箋が少なくなってしまった人は、それだけ人に喜びを与えたことになります。みんなの存在自体に意味があるというメッセージを伝えます。

またじゃんけんができない子には、グー、チョキ、パーの絵が書かれた大きなサイコロを作成して投げてもらうなど、全員が参加できるように工夫(ユニバーサルデザイン)しているお話もありました。



＜セッション 5 合意形成型ワークショップ＞

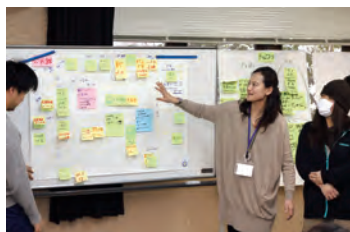
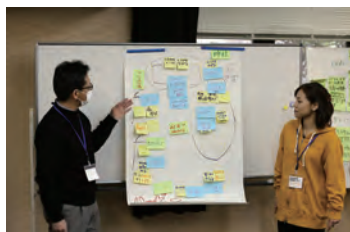
○事例紹介(阿波座南公園ビオトープづくりワークショップ)

今日のメインセッションです。前回同様に中尾氏が今までにワークショップ運営をした経験についてのお話がありました。

○ワークショップ、ファシリテーターについてのプチ講座

なぜワークショップなのか、どんな利点があるのかという点





を簡単にわかりやすく説明がありました。例えば、Aさんに困った現実とそれが解消された理想があるとします。この問題についてAさんはBさんに相談しました。また別のCさんにもしました。それぞれアイデアや解決方法をアドバイスしてくれましたが、個人の応援者が集まって応援団になり、みんなで集い問合うことでもっと良いアイデアが見つかるかもしれません。この創造の場をワークショップと呼んだりします。単調な人たちだけで話し合うよりも、多様な人たちでする方がより良いアイデアが出たりします。お互いを触発し合うことで思わぬ相乗効果が生まれます。

ファシリテーターはワークショップを巧みに進行する人をさし、①場をつくる（グループ編成や場の雰囲気も含む）、②それぞれの想いを引き出す、③共有し、まとめる、役割があるとお話しされました。

○合意形成型ワークショップ体験

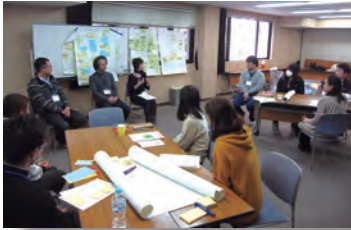
テーマ：「ひなまつり」のイベントを考えよう

- ・多様な子どもたちが集まって参加できること。
- ・場所、プログラム、時間、そのイベントを実施するためにまつわる様々なことも検討する。
- ・新しいグループを作らず、前日のグループのまま。
- ・作業方法は前日に付箋を用いて行った方法と同じ。

ワークショップでの約束として、①人の意見を否定しない、②全員が納得しながら作業をすすめる、ことを前回同様確認しました。これ以外に細かいことですが、①書き出す際のプロッキー（水性ペン）の色や太さ、②付箋は糊がついている方を上にする、③とりあえずの線を引く時は黄色を使うとわかりやすく、最終的に決まったところで違う色を使う等、みんなが見やすいように工夫することが伝えられました。

また、グループの中の誰かが時間を気にすることも伝えられました。ワークショップは限られた時間の中での作業なので、時間管理はファシリテーターにとってとても大切な役割になります。グループワークの中でファシリテーターの役割を体験してもらいました。

どちらのグループも限られた時間の中、とても集中して作業を進めていました。前日にダンスのワークショップと一緒に体験したメンバーなのですでに人間関係ができていた影響もあるかもしれませんが、とてもスムーズに話しが進められており、



自分に思いつかないアイデアが他の人からでたりすると「それいいね、それでいこう」「素晴らしい」といった会話が聞こえていました。

グループワークの後は、発表です。

うるおいチームが企画した場所は「公民館」、ハッピーチームは「神社」など、それぞれユニークなイベントの企画ができました。

それぞれの発表の後は、相手チームへの質問コーナー、また良いところ探しをして、こんなアイデアが面白い、自分たちのチームでは思いつかなかった点を共有することで、また多くの気づきと学びをもつことができました。

<セッション 6 全体の振り返りと共有、質疑応答>

2日間通してのまとめです。

(1) 講師からの意図開きと感想

各講師からどんな気持ちで進行していたのか、また今回したワークにどんな意味と目的があるのかという意図開き、またご自身の中の課題等についてお話しいただきました。

(2) 各参加者の振り返りと共有

今回の講座に参加してどう感じたかを一言ずつ話して頂きました。こうすることで自分の気づきや学びを整理することができます。

またその気づきをみんなで分かち合うことで、自分とは違った意見や視点を共有でき、学びが広がり、深まります。このことでその後のそれぞれの活動により効果が期待できると思います。

前日と同様、ふりかえりシートを記入して、2日間の講座を終りました。終了後はそれぞれ名残惜しそうに名刺や連絡先の交換をして、良いネットワークづくりの場にもなりました。

(3) 郡山会場

日程：2013年3月23日（土）～24日（日）

1日目10：30～17：00 2日目9：00～12：30

場所：ニコニコこども館（こども総合支援センター）

参加者数：11名



【1日目】

最後は福島県での開催です。福島原発事故後、子どもたちの生活は大きく変わりました。今でも屋外活動は制限され、障害のある子もそうでない子も心身に大きな負担を受けていると思われる、心のケアの問題が必要です。

私たちの考えるワークショップは、①子どもたちの想像力を豊かにして自発性を引き出し、②互いの違いを認め、尊重しながら、コミュニケーションをとり、④合意形成することを目指しています。そして、子どもたちが何を思い、何を伝えたいのか、そんな見えない壁を越えて、心と心がつながる場だと思っています。

子どもを指導する方々に、このワークショップの考え方を知っていただき、子どもたちのストレスやフラストレーションを和らげ、人間関係を円滑にする手段の一つに取り上げていただきたく、この地での開催を強く望んでいました。

会場は郡山市教育委員会様のご協力により、子どものための施設「ニコニコこども館」の研修室をご提供いただきました。当日は会場準備のお手伝いもいただき、本当に感謝です。ありがとうございました。

講座の流れ、内容は基本的に大阪会場と同じですが、会場によって特徴がみられたのでご紹介したいと思います。

<セッション0 はじめに（オリエンテーション）>

会場使用の案内、資料、スケジュールの確認等を行いました。

<セッション1 はじめのいっぽ>

(1) プチ講義「ワークショップとは何だろう」

(2) アイスブレイク「自己紹介」

ここまでは、どの会場もほとんど同じ空気が流れています。これから何をやるのか、参加者の不安と緊張感がこちらまで伝わってきます。



<セッション 2 はじめてみよう>

(1) 事例紹介

ダンスサークルトライアングルのロゴは楽器のトライアングルと同じもので、△右下は重なっていません。空いてる部分から、①自分たちの姿を外に発信する、②外からの新しい風を呼び込む、という意味があります。社会の多くの人に、障害があろうとなかろうと、当たり前、楽しく豊かに生きる姿を見てほしく、活動は様々な場所で、またライブパフォーマンス等で、社会との繋がりを大切にしているとお話がありました。



(2) 身体表現ワークショップ

○バーディソング

前回同様バーディソングをみんなで踊りました。身体を動かし、声を出すことで心がほぐれ、気持ちも高まります。全部が上手にできなくても、その場でみんなが共有している空気になんとも楽しくなれます。



○グループディスカッション

次にバーディソングを、自分の現場にいる「この子」がいたらどんな工夫が必要か、を考えました。今回も3人の「こんな子」を想定し、3グループにわかれしました。



①中学一年生、太めの女の子（動くのが苦手）

②重度心身障害があり、音に敏感な子

③対面で1対1で寄り添っていないと自傷行為をする子

どのグループも話し合いだけでなく、実際に動いてシミュレーションしながら検討しており、どうしたらみんなが参加して楽しめるダンスができるか、ダンスを通じてユニバーサルデザインを考えるきっかけになりました。



またトライアングルでの経験談として、ある子どもの好きな音楽を探して、その音楽に合わせてその子を中心としたユニットを作り、ダンスを作っているという事例も紹介されました。

○ダンスをつくり、自らで表現します

(1) 3色ある色の中から、自分の好きな色を2枚選びます。今回は「黄」と「ピンク」が多かったのでこの2色を採用。この2色から1つを選んで、2グループに分かれました。

(2) 各自その色から連想するものをあげて、その後グループで一つのイメージにまとめます。

(3) この連想したイメージ（もの、ことなど）をダンスで表





現します。条件は前回と同様、64 カウント以上、小道具も使用します。今回は両グループとも「花」をイメージしていました。
(4) ダンスができれば、作品を発表します。

<ピンク>・イメージ：桜

桜は、日本人にとって特別関心のある花です。現在放送中のNHK大河ドラマは、「福島・会津」が舞台で、番組名には「桜」がついていることもあり、このイメージに絞りました。見事に咲き誇る桜からイメージしたダンス創作は、和気あいあいと今日知り合ったばかりとは思えない程の仲良しぶりで進められていました。

<黄色>・イメージ：たんぽぽ

たんぽぽは鮮やかな黄色で、春の陽気さを引き立てる花の印象がありますが、どんな場所でも生えて、咲き終わったものから順に綿毛になって飛んでいくという、強い生命力と繁殖力があります。福島の子どもたちも、たんぽぽのように可愛らしく、力強く生きてほしいという希望が込められたようです。

たんぽぽの一生を表現し、綺麗に仕上がっていました。

<セッション 3 ダンスワークショップのふりかえり>

○ダンスセッションのふりかえり

おなじみのスタイルです。全員丸くなって皆の顔が見えるように座ります。各自感じたことをお話ししていただきました、話すだけのミーティングはよくあるが、身体を動かしながら創作することが新鮮だった、短期間ということで集中できた、知らない人同士が同じ目標に向かってコミュニケーションを取ることで、難しさもありながらも楽しく体験することができた、等、それぞれいろいろな気づきをもたれたようです。

また寺田氏からは、障害があろうとなかろうと、どんな人でも身体は動きたがっている。動くことで言葉も出てきて、新しいことが生まれる。身体もコミュニケーションの大切な手段だということが伝えられ、頭では分かっているけど実際に体験することで、実感していただけたワークショップだったのではないのでしょうか。

▼空間をデザインする

机や椅子の並べ方等、空間デザインが場に与える影響は大きく、今回の講座でもいろいろな使い方をしています。椅子や机の配置だけでなく、居心地がよいスペースにするには、お茶や



お菓子、BGM等も要素になります。部屋の一角にカフェスペースを設けたり、講座開始までの時間や休憩時にはBGMを流したりと、ちょっとホッとできる演出をしました。

また参考図書や資料を用意し閲覧スペースも作りました。

○付箋を用いたワークによるふりかえり

ここで空間デザインを変えます。机を出して、2つの島を作りました。机に角度をつけるだけで、全員が前を見やすくなり、ファシリテーターへの注目度が高まります。グループは先程と同じメンバーです。



1. テーマ1「ダンスワークショップでの収穫、気づき」

(1) はじめは各自の作業です。できるだけ多く書き出します。ただし、付箋1枚につき1つのこと(もの)しか書きません。

(2) 机の上の模造紙に貼ります。

(3) 似たものをグループにまとめます。

このグループに名前(ラベル)もつけます(親和図)。まとめる時には他の人にも意見を聞き、みんなが納得してから付箋を動かすルールを忘れずにしましょう。



2. テーマ2「これは困ったと思ったこと」

(1) 各自、付箋3枚以内に書き出します

(2) その次の作業は先程と同じです。



3. 発表にむけた作戦会議

1.2.の結果を全体で共有するために、グループ内で発表方法を相談します。制限時間は5分。内容の確認、要約、役割分担等、こちらもみんなで合意しながら決めていきます。



4. 発表、共有

作戦タイムを設けただけあり、どちらもスムーズに発表していただきました。また、「ワークショップの収穫」では、両グループともに共通しているのをまとめると、「何かを共有し、分かち合うことができる手段がワークショップであり、そのためには、心を開いて、否定されない場が必要。否定されない場であるからこそ、互いに伝え合うことができる」ということに気づいていただけたことが分かりました。





【2日目】

<セッション4 アイスブレイク「じゃんけんダンス」>

大阪会場と同様、朝一番から THE BOOM の「風になりたい」の音楽に合わせてじゃんけんダンスを体験しました。バーディソングは決まった音楽で踊りますが、じゃんけんダンスは、その日の気分や参加者にあわせて、テンポの速いものにしたたり、遅いものにしたたりと、好きな音楽でできるダンスです。このダンスも全体をリードして、掛け声をかけるリーダーの重要性を感じました。リーダー次第で参加者の楽しい度が増します。

<セッション5 合意形成型ワークショップ>

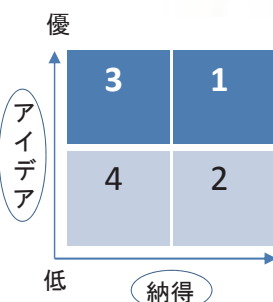
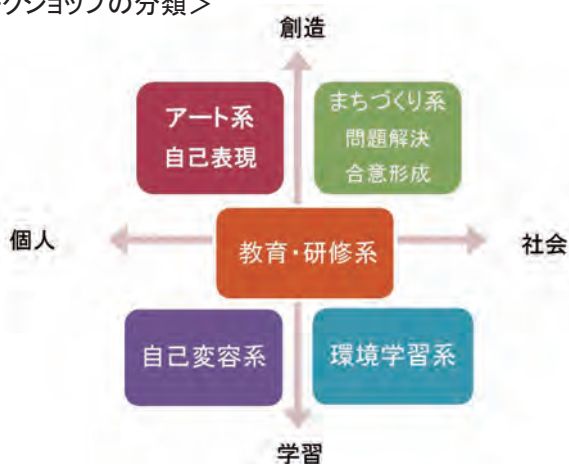
○事例紹介（阿波座南公園ビオトープづくりワークショップ）

中尾氏が今までにワークショップ運営をした結果についてのお話がありました。このワークショップには5才から78才の幅広い年齢の方が参加。5つのグループにわかれ、各プランを作成。紙模型づくりを経て全体で合意したプランにまとめ、その後、公園に実際に行き、実寸を検討していく、といったかなり大掛かりなワークショップの事例です。

○ワークショップ、ファシリテーターについてのプチ講座

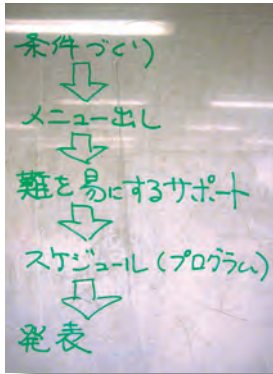
主な内容は大阪会場と同じ。前述していないものを紹介します。

<ワークショップの分類>



●左図で、どの位置が一番プロジェクトとして成功するか？

⇒ ①、②と思った時はワークショップで進めていくのが有効的といえるでしょう。なぜならみんなで納得しながら進める手法だからです。



＜ワークショップのルール＞

1. 全員が発話できるよう、1回1～2分で発話する「話し上手」を目指しましょう。
2. 集まったのも何かの縁。互いの話に耳を傾ける「聞き上手」を目指しましょう。
3. 質より量を重視します。たくさん意見を出し合いましょう。
4. 人の思いへの批判は禁物です。良い悪しは判断しないで発話しましょう。
5. プラス思考で結合改善。他人の意見に便乗して発展させましょう。
6. 評論は不要です。当事者として、創造し表現することを楽しみましょう。



○合意形成型ワークショップ体験

本格的なワークをする前に、準備運動的なワークをしました。

- (1) それぞれ、1枚の緑の紙を5枚に切ります(それぞれ自由に)
- (2) 切った紙をグループ全体でまとめてシャッフルします
- (3) ランダムに1人5枚ずつ配ります
- (4) 元の四角形に完成させます。

条件) 言葉を使わない、人のものを取ってはいけない、自分のものを相手にあげるのみ。

時間内に5枚の四角形(5人グループ)が完成したグループはとても満足げでした。ここでは共同作業をするときのポイント「思いをやる」ことを体験していただきました。



テーマ:「それぞれが関わっている子どもたちの交流の場を考えましょう」。

各チームで左上のスケジュールで進めていきました。発表後は相手チームの良いところ探しと感想を伝えあいました。



＜たんぽぽチーム＞このチームは1回限りのイベントではなく、一年間を通して数回のプログラムを企画しました。四季を肌で感じながら交流できるものを中心に、ニーズに応じてグループごとの活動もありました。

＜桜チーム＞チーム名の通り、「みんなのお花見」を企画。内容のみならず、広報、経費、安全対策等、実施する際に必要なあらゆる項目に関して綿密に計画されていました。



セッション6 ＜全体のふりかえりと共有＞

講師の方々が、あの時、何を感じ、なぜその判断をしたのか、また自身の今後の課題について等をお話しいただき、全員で共有する機会となりました。最後にまた振り返りシートを記入して、2日間の講座を修了しました。



4. 講師からの振り返り

評価と今後の課題



(株)ランテック計画事務所取締役

中 尾 幸 彦



○ワークショップと合意形成と私

音楽ムーブメントや車椅子ダンスなど、障がい児者を含んだり対象とした実践研究をしておられる、星山先生（札幌）・寺田先生（大阪・郡山）と一緒にお手伝いさせて頂きました。私は、公園づくりや景観まちづくりなどでワークショップを経験していますが、障がい児者を対象とした経験はありません。

ワークショップという場の活用は、創作・学習・自己変革・合意形成など、多様な領域で行われています。私が関わる領域での最終成果は、公園デザインやまちづくりのルールなど、社会のかたちに残る具体的なものになります。これらは毎年作りかえる訳にはいけないため、まちづくり系ワークショップでは合意形成を大切にしています。

合意形成そのものは、障がい児者を対象とするプログラム作りなど、固定されたかたちを最終成果としないワークショップの場面でも活用できるものであるため、主催者はこのメンバーでの組合せを企画されたのだと考えています。

○ノンバーバルコミュニケーションとの組合せ

講座のプログラムは、ノンバーバルコミュニケーションの実践を初日に置くタイプと、2日目に置くタイプで行いました。初回の札幌が2日目、大阪と郡山が1日目です。

子ども向けユニバーサルワークショップの企画運営ということを考えると、ノンバーバルコミュニケーションの重要性は非常に大きく、実際のプログ

ラムの中で幅広く応用することができることを、多くの受講者が実感しておられました。

札幌では、まず合意形成の手法を体験し、2日目にノンバーバルプログラムが配されました。体験後は療育領域での質問が多く出され、受講者の専門領域を反映したものとなりました。この後に合意形成体験を置いて、質問内容や関連する問題などを振り返ることも有意義ではないかとの思いを主催者と共有し、大阪と郡山では、この点を入れ替えたプログラムで実施することになりました。

ノンバーバルコミュニケーションの体験直後に、それぞれが得た気づきを共有できたことは有意義だったと思います。

○多様性が確保できた受講者の構成

各会場とも障害者福祉を専門とする方の割合が多く、教育と保育の領域も3会場に共通してみられました。このほか、札幌では子どもと介護・看護、大阪では障害者スポーツと心理、国際、札幌と郡山では行政からの参加があり、障害のある子もない子ども共に楽しめる場を考えるというユニバーサルの趣旨を反映した構成になっています。

各会場とも受講者属性が多様である分、異なる領域の考え方に多くの気づきが得られたのではないかと思います。振り返りシートでも、1人では思いつかない解決策やアイデアに触れることができたとの記述が見られました。

○プログラムを充実させる難しさ

主催者によるプログラム構成は充実していたと思いますが、受講者からはもっと学びたいとの反応もあり、今後の検討が求められるところです。自己反省からは、ワークショップの知識と体験を共有するための時間が不足した実感があります。そのため、2時間から2時間半程度のプログラムでこれらを共有する方法について、再検討しなければならないとの反省を得ました。

例えば、説明時に板書する内容をスライド化したり、紙に書いておいて張り出すなどの方法は時間短縮には有効だと思っています。ただ、その場で書きながら話すことには、時間を共有することで伝達と理解の速度差を小さくできるメリットもあり、捨てがたいものがあります。

グループ作業でも時間については葛藤がありました。話し合いが進まない場面では、自発的な気づきを待つ時間をとる余裕がなく、しかし講座としては考えて頂きたいという思いもあり、この点で受講者の皆さんにはご迷惑をおかけしたことの反省があります。

これらは講師のシミュレーションの充実と、プログラムの時間の取り方によって改善する必要があると考えています。

○伝えるべき内容の改善

合意形成をする上での注意点や、対立の回避などについて知りたい、との声も届いています。入門編としては、①ワークショップのデザイン ②ファシリテーターのコミュニケーション ③意見の整理—程度は、簡単に伝えて体験すべきだったと思います。そうするための伝達の効率化と時間の確保については、ここでも課題となります。

○振り返りシートの有効性

大阪と郡山では、合意形成が2日目に移り、1日目の振り返りシートに記載された、学び足りなかったことや2日目への質問を、翌日に反映させることが可能になった点はよかったと思います。受講者からも、記載に対して2日目で回答があり良かったと

の反応が見られました。講師が場と時間を共有することで、振り返りシートが有効に機能するということがだと思います。

受講者は事前にエントリーシートを記載しているため、振り返りシートと合わせて読み返すことで、気づきを得ることが増えるのではないかと考えています。

○ノンバーバルコミュニケーションでの気づき

ノンバーバルコミュニケーション・ワークショップでは、ペアになって体験するアクティビティがあり、人数の関係で幸運にも参加する機会に恵まれる場面がありました。札幌ではET ごっことパペットを使ったコミュニケーションを体験し、大阪と郡山ではバーディソングとじゃんけんダンスを体験しました。特に大阪では、ダンスの創作と発表までを含めてフル体験できたことはありがたいことです。

ノンバーバルを主体としたコミュニケーションはこれまで体験したことがありませんでした。お手伝いするワークショップではバーバルコミュニケーションを基本としており、ノンバーバルの要素は言葉に添えるジェスチャー程度のものでした。

今回の体験は、アイスブレイクの大きなヒントになりました。また、自分とはどういう人間かを知るときっかけにもなり、「わたし」を「みんな」に知ってもらうプロセスの再確認にもなりました。受講者の皆さんもそのような収穫を得られたのではないかと考えています。

特に、星山先生の「みんな違って、みんないい」や、寺田先生の「体は動きたがっている」に、私は深く納得できました。

そして異なる領域であっても、ワークショップ自体の基本は共通していて、自己の内外をつなぎやすくする場であることは、まったく同じであることを確認できたことも大きな収穫になりました。

大変貴重な学びの機会を得たことを有り難く思っています。ナイスハート基金の皆さん、星山先生、寺田先生、そして受講者の皆さんに感謝します。ありがとうございました。

ファシリテーター育成講座を終えて



名古屋短期大学教授 寺田 恭子



皆さんこんにちは。今年の3月に大阪（大阪市立西区民センター）と郡山（ニコニコこども館）の2ヶ所で、それぞれ2日間に渡りファシリテーター育成講座の講師を担当させて頂きました寺田です。

私は約20年間、障がいのある方々の身体活動や表現活動（車いすダンス）に関わり、特にここ数年は重症心身障がい者のフィットネスに関する研究に携わっています。私はそれらの活動を通して多様な人々と出会い、たくさんの時間を共有しながら、皆が共に楽しめる場を作ってきました。そのプロセスの中では、どんなに重い身体障がいがあっても、身体はアプローチの仕方次第で“変えられる”可能性を秘めていることを知りまし、さらにどんな身体も“動きたがっている”のだという、その極めて明快な真実を目の当たりにしてきました。

しかしながら、このような経験の蓄積はあるものの、今回の講習会に私が持っている何をどのように関連付けて、“ワークショップを知り、ファシリテーションを学びたい方々”に満足できるものを提供できるのか、それは私にとって大変重い課題でした。お引き受けした時からあれこれと悩み続けましたが、事前打ち合わせを経て、講習の内容を①知識や技術（方法）として参加者の皆さんがもって帰ることのできるもの、②ダンスというノンバーバルコミュニケーションを通して、自分

と他者とのつながりやノンバーバルコミュニケーションの可能性について考えられるものという、2つの内容に絞り込むことで落ち着きました。

さて、当日はどうだったでしょうか。大阪会場と郡山会場、場所が違えば人が違うのはもちろんですが、集まった人たちが作る雰囲気も全く違うのは当たり前。よって、その日のその時間、その教室に集まった初めて会う人たちと共に学びあう“その場”は、同じプログラムを提供しているとは言うものの、全く違ったものになりました。まさに、“この場”をどのようにコーディネートしていくのかということもファシリテーターの役割の1つだと思います。また、参加者がお互いの考えを認め合いながらコミュニケーションができ、その上で各々が主体的に思考し、行動できるように工夫して、その場が参加者全員の主体的参加によって成長していくように手助けをするのもファシリテーターの役目です。

そう考えると、今回は私自身がファシリテーターそのものになるわけです。自分自身の方法論を通して、ファシリテーターとして大切なことを皆さんにお伝えしつつ、言葉にできない部分も含めてファシリテーターに必要な“何か”を感じ取ってもらえる工夫が必要となりました。講師の私も学びの途中ですので、この講習は回数を重ねながら、講師と参加者が共に成長していける場であるのだなあと改めて感じた次第です。



では実際の内容を振り返ってみましょう。最初にバーディソングという音楽に乗って踊るダンスを行った時のことです。私がバーディソングを踊る時、なぜ

円形で踊るのか、なぜあの動き（振り付け）なのかを説明しました。しかし、それはこのダンスに限らず、より多くの多様な人々と楽しいひと時を共有する時の考え方が形になったものなので、そう考えて受け止めてもらえると応用の幅も広がります。また、私の立ち位置は毎回入口が見える位置で、参加者の皆さんはそれに背を向ける位置でした。出入り口が見えると集中力が欠ける方も時にはいるでしょう。これは配慮というより、経験を通して身についたものです。ジャンケンダンスの様々な工夫もバーディソングと同じ視点から考えだされたものでした。ダンスの楽しさをできるだけ損なわずに、多くの人に楽しさを感じてほしいので、1つのダンスの中に異なる視点から取り入れた動きをミックスしてみました。全部は楽しめなくても、“ここはできる！”“これが楽しい！”と思ってもらえることが大切です。また“ここができなかった”とか“自分はダンスが苦手”という考え方が払拭できるような言葉がけも重要です。ジャンケンでたくさん負けてしまった人への言葉がけも、別な場面で応用ができるかと思います。

さて、参加者の皆さんにとって一番大変だったのは、初めて会った人たちとグループでダンスを創作するという課題だったと思います。ここでの、私＝ファシリテーター



ターの立場としての工夫は①小道具の使用を可にすることによって、イメージを作りやすくし、それを媒介にしてコミュニケーションを取りやすくすること。②ダンスの枠（お題やカウント）を設定し、この枠ならできそうだという見通しを持たせること。③各グループの進み具合も少しは意識できるように、異なるグループの情報を途中で与えることでした。参加者の皆さんは、各グループの中でそれぞれがファシリテーター的立場を自覚しつつ、多様な人々と合意形成をしながら1つのものを作り上げていく難しさを経験されたと思います。しかし試行錯誤しながらも皆で創ろうという意欲と協力的な姿勢は本当に素晴らしかったです。2つの会場合わせて4つのグループの創作ダンスはどれもみな躍動感があり、イメージが深く広がるものばかりでした。

今こうして講習会を振り返ると、鈴木さんのアイズブレイク、ダンスのワークショップに対して客観的な視点からの振り返りを手ほどきして下さった中尾さんの手法、それら一連の学びを通して、多様な角度からモノを見ようとする力が自分もアップしたかなと思えました。しかし、こういった経験を重ねて力がついたように感じても“もうおしまい！”はありません。私は講習会を終えて、“ここからの始まり”を強く意識したのですが、参加された方々は如何でしたでしょうか。

機会があれば、今回参加された皆さんと次のステップを共に学びたいと思いました。またチャンスがありますように！



ファシリテーター育成講座で学んだこと

明星大学教育学部教授 星 山 麻 木



なぜ今、ファシリテーションなのか？

私は養護学校（現在の特別支援学校）で教員をしていました。その後、研究者として教員養成に関わるようになって、16年になろうとしています。その間、多くの学校での会議を経験してきました。学校においての会議の時間は私にとって、実はとても退屈な時間でした。じっと黙って誰かの意見を受け身で聴いているか、それとも一方的にリーダーシップを発揮してみるものの、多くの方が本音で話さない独特の雰囲気からどうやって意見を引き出すか、いかに心を砕くのか。

私にとって典型的な会議というのは、あまり創

造的な場ではなく、我慢比べのような印象さえありました。そればかりか、本当に話し合い、違う意見を出し合い、より高次にある目標や合意形成に向かって時間を使わなければならない課題は、いつも学校の周囲にも、子どもの周囲にも山積しているのです。

実際、私も、大学のゼミなどの演習では、個人のプレゼンテーションの練習、或いは、グループごとに対立した意見のどちらが正しく、どちらが強いかを競うディベートなどの練習をしながら、自分の意見をきちんと述べ、いかに相手に勝つか、論じてきました。

でも、退屈な会議の時間にも、学生とのディベート

の時間にも、考えていたものです。このような方法は、ほんとうに私たちの社会貢献に関する仕事や子どもの幸せに繋がることのできるのだろうか？何かもっと、一人ひとりの意見が尊重され、合意形成に導ける良い方法ってないものなのか？

一人ひとり、お互い異なる立場や意見を理解し合い、共感を促し、創造的な共有化を図るには、それなりの時間がかかります。それでも、意見だけ出し合っては多数決を繰り返す会議は、方法論として何となくおかしいと感じ



特別な支援を必要とする子どもたちへの指導「音楽ムーブメント」の様子

ながらも、長い間、どのようにすればいいのかわかりませんでした。

次第に、私は、異なる意見、時に対立する意見であっても、どんな風にすれば、合意形成できるのか、興味をもつようになりました。そんなとき、知ったのがワークショップの考え方、ファシリテーションでした。

私は、支援を必要とする子どもたちの教育を専門としております。私の身近なところにいる子どもたちは、暦の年齢は、参考にはなりますが、理解するときの基準にはなりません。子どもの多様で、誰と比べても意味のない、その子唯一の存在そのものをいかに理解し、ありのまま受け入れるのか、ここが重要であると思います。

また、支援を必要とする子どもたちのサポートは、一人ではできません。子どもは特別支援が必要か否かに関わらず、ありのままを柔軟に認め、受け入れ、周囲の大人がいかに多様な価値観で受けとめていくか、によって、その可能性が制限されたり、受け止められると思います。

支援を必要とする子どもたちとの関わりは、ワークショップそのものであり、本物の指導というものは、実は、ファシリテーションそのものではないだろうか、と考えるようになったわけです。

札幌でのワークショップは、通常、特別な支援を必要とする子どもたちの指導者に対して行うユニバーサルコミュニケーションを多く体験する構成になっています。



例えば、指と指を合わせるだけで楽しむコミュニケーションは、言葉に頼

ることの多い私たちですが、子どもは、大人のように言語で表現するわけではなく、五感で多くを感じ、表情、しぐさ、行動など、多くの言葉ではないもので、サインを出しています。

その基本に立ち返る体験をすることで、人は本来、多様な感じ方をするものであり、人と違う自分を感じ取ることが原点にあるのだということを思いだせる体験です。

人と違う感じ方を伝え合い、共有することで、だからこそ、人と丁寧にコミュニケーションすることが大切なのだということが思いだせるのではないかと思います。

ファシリテーションとは、様々な手段で、自分とは違う相手を理解し、だからこそ理解しようとするとき生まれる創造的な何かを楽しむこと、ではないかと改めて感じました。

5. アンケート集計結果

講座を受講いただいた方に、後日、アンケート用紙を後日配布し、ご協力いただきました。

回答数：20 件（回収率 40%）

1. この講座に参加されたきっかけを教えてください（複数回答あり）

（１）	ファシリテーターになりたいから	1 件
（２）	ファシリテーションを仕事や学習に活かそうと思ったから	14 件
（３）	ワークショップのアイデアを仕事や学習に活かそうと思ったから	7 件
（４）	その他	6 件

その他の記述として

- ・受講している学校の講師の方に進められ興味を持ったので
- ・講座まるごとの経験を自分自身の財産として身につけたいと思って
- ・現在の職場環境が悪く、かなりのストレスを抱えていたので
- ・職場の勤、会社の研修として参加

2. 全体を通して満足いただけましたか

（１）	満足	10 件（50%）
（２）	ほぼ満足	9 件（45%）
（３）	やや不満	1 件（5%）
（４）	不満	0 件（0%）

3. 受講費についてどのように感じましたか

3-1-1 受講前

（１）	高い	8 件（44%）
（２）	ちょうどよい	9 件（50%）
（３）	安い	1 件（6%）

3-1-2 ちょうどよいと思われる金額

1,000 円（1 件）、2,000 円（1 件）、3,000 円（4 件）、7,000 円（1 件）、3,500 ～ 4,000 円（1 件）

3-2-1 受講後

（１）	高い	6 件（33%）
（２）	ちょうどよい	9 件（50%）
（３）	安い	3 件（17%）

3-2-2 ちょうどよいと思われる金額

1,000 円（1 件）、2,000 円（1 件）、3,000 円（3 件）、3,500 円（1 件）、5,000 円（1 件）、7,000 円（1 件）、10,000 円（1 件）

4. 日程について

4-1 2日間の開催（期間）

- | | |
|-----------------|------------|
| (1) 問題ない | 13 件 (65%) |
| (2) できれば1日だけがよい | 5 件 (25%) |
| (3) その他 | 2 件 (10%) |

その他の記述（短かった、1日に凝縮もしくは合宿ぐらいに濃密に）

4-2 3連休中の開催（札幌会場のみ3連休中に実施したため、札幌会場のみ質問事項）

- | | |
|-------------------|------------|
| (1) 問題ない | 11 件 (85%) |
| (2) できれば連休でない方がよい | 2 件 (15%) |
| (3) その他 | 0 件 (0%) |

5. どのような収穫がありましたか。どの場面で、どんな学びがあったか、印象に残るもの等。（自由記述）

- ・ワークショップの中で、まず人の意見を否定しないという話がありました。みんなで意見を出し合い、最適なものを選ぶ。頭ごなしに意見を通そうと、相手を否定するような事があったりしたが、考えを改めさせられました。また二日目、人間を理解する評価はひとつではない、みんな正しくみんな違う、という多様性の尊重。それぞれの良さを光らせる答えは開いてから引き出す。というようなお話で、自分自身考えを改め、実行できるようになりたいと感じました。
- ・なかなか自分で仕事（ボランティア）に活かそうとは思っても、無理かなと思っていましたが、終わりの頃には「できそう、やろう」という気になり、友人もやりたいという人がいて、新年からポツポツやる計画でいます。
- ・とてもやる気のある方が多かったので、雰囲気が良かったです。内容的にはもの足りなかったです。今回のファシリテーターの方々が手探りで働いている感じがして、こちらとしては納得ができませんでした。貴重な時間とお金を使った甲斐がちょっとなかった気がしています。
- ・人との出会い、普段お会いできない方との交流や情報交換ができたこと。
- ・いろいろな方との出会いも含め、全てが収穫でした。最後、1人の講師の方が「自分の子育ての時を思い返して、どうしてあの時抱きしめて、一緒に喜んだり、悲しんだり、感情を共有しなかったんだろうって思いました」という感想がすごく心に残っています。
- ・様々な年齢と職業の方が真摯な姿勢で学ぶ意欲が新鮮だった。
- ・ランダムなグループだったが、1つのテーマに思いがけない発想を発見した事。
- ・皆さんが積極的に自分自身の言葉で意見を述べる場だったのは充実していたと思う。
- ・ワークショップ自体
- ・ファシリテーターの話の内容や話し方、ファシリテーターにもいろいろなタイプがあると思いました自分も経験を積み少しでも近づきたいと思います。
- ・ファシリテーターの役割がどのようなことかがわかりました。
- ・初対面の人との関係づくり
- ・ワークショップに限らず、仕事の中（打合せや会議等）にたくさん活かせる内容があったと思いました。中尾先生にしても、星山先生にしても、参加者の考えや意見、成果をととても大切にされているなど、ど

のセッションにおいてもそう感じました。

- ・自分の企画を計画におこしていたが、今回のファシリテーター育成講座では、たった5～6名のグループなのに、自分が思いつかないような意見が出て、それを受け入れることが大切になってくるということがとても印象的でした。
- ・本来ユニバーサルであった社会を取り戻せそうな希望を持ちました。ノンバーバルであっても、通じ合える、伝わる（怖いほどに）事を改めて確信したし、障害という言葉の無い社会になれば良いなと感じました。
- ・星山先生の「障がい児は私たちに何かを教えるために生まれてきている」というお話はとても心に響きました。
- ・人の話し方、他人がどのように自分を思うのか、2日目の時に学ぶことができました。また、1日目の時には意見をいうこと、まとめることなどの難しさを学びました。
- ・初めて出逢った人たちと2日間一緒に活動するのは不安もあったが、とても充実した時間をすごせた。それは講師の先生の適切な働きかけのおかげだったと思う。講師の先生の技を盗んで、自分も実践したいと思った。
- ・自己紹介が楽しかった。出身地等紙に書いて紹介をした事が初めてで新鮮でした。
- ・ワークショップでグループメンバーの性格、自分の性格（思うように意見が言えない等）がみえて勉強になりました。
- ・ワークショップのあり方、目的をあらためて学べた。
- ・本当に基本的なことなのでしょうが、心と体のバランスを取ることの大切さを改めて学びました。バランスが取れれば集中もしやすいものだと思いました。
- ・「小さな合意」が合意形成につながる
- ・ダンスづくり
- ・ただ話し合うだけでなく、身体を動かしながら話し合うと具体性が出てきて内容がまとまっていくこと。また、達成感も増しているような感覚があった。
- ・ワークショップで合意形成を図って、回数を重ね、じっくり作り上げていく過程から生まれる達成感はずっと素晴らしい。

6. 自分の現場や学習で活かしてみたいこと、活かせる部分は見つけられましたか。それはどんな内容で、どのように活かそうと思いますか。（自由記述）

- ・現在、介護職の資格を取得するために受講中ですが、各先生方の意見等を取り入れる時に多くの答えがあり迷うことも多くあります。また今後現場に出た時など、一つの答えに執着せずに、相手の方々それぞれに最適な答えを導き出せるようになればと感じています。
- ・一つは伝統あそびボランティア（自分が代表）の場で、運営を進めるにあたって来年度の事を話し合うために。二つ目は男女共同参画の考えを広めるために、一般の人向けの勉強会に。
- ・レベルをはっきり知っておきたかったです。「入門」や「初心者」と書いてあれば良かったと思いました。自分が次回する時はその点を自分でもはっきり書いておこうと思いました。
- ・コミュニケーションの取り方について、1日目の自己紹介、2日目のET、指人形を使ったやり方など実践してみたいと思っています。

- ・ブレーストーミングの方法
- ・自分自身からコミュニケーションを取るべきと思っているが、受ける相手の心の成熟度や個人的環境の背景等を考慮すると困難さもある。
- ・思い込み部分をリセット（相手を柔軟に見て受け入れてあげたい）
- ・現場で活かせるよう部署移動を申し出たが…どうなるか…
- ・ワークショップのルールで意見を否定しない、合意形成等、いろいろなことを吸収できたと思っています。そのことを少しでも職場に広げていければいいと思っています。
- ・会議などで全員の意見を聞く方法（ポストイット）の良さ、それをどうまとめるか等、活かしたいと思いました。
- ・どのような意見であってもまず受け入れること、意見を自由に出せるような雰囲気づくりや進め方に気を配ること、ポストイットの活用。
- ・遊びに近い活動を通して、初対面の人でも打ち解けあえるような工夫は、大人だけでなく子どもにも通じるものがあると思います。
- ・今度の行動計画ではぜひポストイットを用意してみんなで行事をつくりあげたいと思います。
- ・とにかく自分の内なる言葉をアウトプットする、書き出す作業で、こんなにも新たな発見があるのかと感動しました。
- ・少数意見、反対意見も捨てずに物事を進めていく方法を考えたい。
- ・子どもたちと関わる上で、これからどのようにしていくか、危険な場所、楽しみ方等、みんなで話し合うことの大切さを感じられ、今後話し合うことをしていきたい。
- ・講師の先生のファシリテーションの手法を観察したり、活動の中で感じる事ができたので学校現場で活かしていきたいと思った。
- ・障害児施設等で音楽活動をしているので、そこでユニバーサルなダンスを使ってみようと思います。
- ・各種講習会等で活かしたい。
- ・みんなの意見をスムーズに聞きだし、まとめる際に活かせたらと思います。
- ・ダンス等の創作と話し合い→ミッションを明確にしたい。どのような立場、何を目指すのか、どれが何につながるのか？
- ・会議等でなかなか意見を出すことができない新人職員や物静かな職員から意見を引き出す方法として活用したい。
- ・バーディソングはレクリエーションの時間にみんなで楽しみたい。（身体、知的、どちらも一緒に楽しめるよう振り付けを工夫したい）

7. 今後、同様のテーマで講座を実施する場合、この講座は何を改善するともっと良くなると思いますか。（自由記述）

- ・各グループそれぞれの意見を全員に（写真を写していたのだから）表のままだでも配ってほしかった。（個人情報に関わるなら名前は伏せても）。せっかく素敵な自己紹介もアイデアを共有させてほしいと思います。
- ・ふり返しシートなるものを書いたのですが、全く初めての場合、あの時間であのシートを埋めるのはかなり難しいです。どんなことをやるのだろうか、そんなことを考えているうちに終わってしまったので

もう少し時間に余裕があった方が良かったのではないのでしょうか。

- ・ワークショップ慣れしている人（私は国内でも海外でも色々と受けてきて、自分でもワークショップをいろいろやってきたので）でも、もっと収穫があったと感じられるように、あまり入門的にしすぎないようにしてほしいです。全体的に初歩的すぎて残念でした。もっと高度な内容も期待していました。学生さんには良いのかもしれませんが。あまり良いことが書けずに申し訳ないのですが、率直に書かせて頂きました。ありがとうございます。2日目の星山先生の「大きなボール」のキャッチボールは楽しかったです。
- ・今回は講師の方や参加者の方たちが初めから和やか感があり、楽しく受講させて頂きました。1日目と2日目のプログラムが入れ替わっていたらどうだったのか、と思いました。
- ・是非合宿でやっていただきたいと思いました。
- ・導入部分はスピードアップでも良いのでは？
- ・各種の職業を持つ人々が折角の機会に集まったので、フリートークや感想を全員から聞く時間も取って頂けたらと感じた。
- ・1人1分の感想をまとめるのも良い勉強になるのでは。
- ・良い時間を過ごせて感謝です。
- ・全体的に良かったと思います。
- ・多方面の方がもっといると良かったです。
- ・講師の方も混ざって参加できるセッションがあると良いのではないのでしょうか。
- ・講師の先生方の一方的なお話し、という講座はよくありますが、今回は私たちに合う内容を考えていただき、参加型という内容だったため、とてもわかりやすかったです。ありがとうございました。
- ・少し雰囲気固く、1日目は緊張感がありました。ファシリテーターの方が遠く感じたので、もう少しやわらかい雰囲気をお願いしたいです。
- ・せっかくいろいろな職業の人たちが集まったので、それぞれの話しをもっと詳しく聞きたかった。思いや悩みなど。
- ・今のままで良いと思うが、なんとなく話していくスピードがゆっくり過ぎているような気がしました。
- ・参加者が実際にファシリテーター役になって実践する機会があるのもっといいと思った。
- ・参加費は学生のため、もう少し安いとより参加しやすくなると思いました。
- ・ワークショップでの作業時間をあと10分程長くしてほしいと思います。
- ・参加人数は今回位（9名）の少人数でお願いします。
- ・今回は「子どもたちのための」という部分が今一つ意識できなかった。「子ども」を想定しやすくすると良いのではないのでしょうか。ワークショップのテーマがあらかじめ決められていたため、意識しにくかったのかもしれませんが。しかし私自身の意識の問題かもしれません。
- ・次回はもう一步踏み込んだ内容でパート2を実施していただけることを希望します。
- ・合意形成のプロセスは面白いが、せっかくの気づきがつかないような気がしてしまう。もちろん、つかないことはないのだと思うが、この場かぎりになってしまうのはもったいない。
- ・とても良い内容なので、もっと普及すると良いと思う。全国を回っていらしてお忙しいと思うが、定期的に（県内で年1回とか）開催していただけたら、仲間も学ぶ事ができると思う。

6. 資料

(1) 新聞掲載記事

2013 年（25 年）2 月 11 日 福祉新聞

◆子ども向けユニバーサルワークショップ・ファシリテーター育成講座▷3月2・3日＝大阪市の市立西区民センター、同23・24日＝福島県郡山市のニコニコこども館▷参加体験型の学び（ワークショップ的な手法）を進行するファシリテーターの基本的な技術や役割などを、講義と体験から学ぶ。講師は寺田恭子・名古屋短大教授、中尾幸彦・ランテック計画事務所取締役ら▷各25人▷5,000円（大阪は学生割引あり）▷ナイスハート基金☎03・3434・2170 5401・0681

2013 年（25 年）3 月 27 日 福島民友新聞

ファシリテーター
技術や役割を学ぶ
郡山でワークショップ
国際障害者年記念ナイス
ハート基金主催の子ども向
けユニバーサルワークショ
ップ・ファシリテーター育
成講座は23、24の両日、郡
山市のニコニコこども館で
開かれた。内閣府と厚生労
働省、県教委、郡山市教委

の後援。
講座は「ワークショップ
を知る、ファシリテーショ
ンを知る、人と人をつなげ
る」がテーマ。県内外から
11人が参加し、障害のある
子どもでもない子ども、安心
して居心地がいいと感じる



ニコニコこども館で開かれた育成講座

場づくりに興味のある人を
対象に、参加体験型の学び
を進行するファシリテータ
ー（世話人）の基本的な技
術や役割などを学んだ。
初日の23日は、名古屋短
大の寺田恭子教授らが講師
を務め、「障害のある子と
ない子が一緒に楽しむワー
クショップ」や「身体表現
ワークショップ」を考えよ
う」などのテーマで講義し
た。

2013 年（25 年）4 月 8 日 福島民報新聞



子どもが安心して居る場
所づくりを学んだ講座

子どもが安心して居る場所を
郡山で「進行役」養成講座
障害の有無にかかわ
らず子どもが安心して居
る場所をつくる「ユニ
バーサルワークショップ」
の進行役を養成す
る講座はこのほど、郡
山市のニコニコこども
館で開かれた。
国際障害者年記念ナ
イスハート基金の主
催。基金の鈴木実事務
局長、市民協働型のワ
ークショップに取り組
む中尾幸彦ランテック
計画事務所取締役、寺
田恭子名古屋短大教授
の三人が講師を務め
た。
県内で障害児の教育
に携わる十人が受講し
た。二日間の日程で、
障害に関係なく子ども
と一緒に楽しめるダン
スや身体表現のワーク
ショップの運営方法を
学んだ。



平成 24 年度
子ども向けユニバーサルワークショップ・ファシリテーター育成講座

実施報告書

平成 25 年 4 月発行
編集 / 発行
公益財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金
〒105-0022 東京都港区海岸 1-4-26 ゆうらいふセンター
電話 03-3434-2170 FAX 03-5401-0681
URL <http://niceheart.or.jp/>